

〔特別号〕 栗林中将と日本陸軍

〈平成15年7月研究会 7月1日〉



発行所

同台経済懇話会

〒104-0061 東京都

中央区銀座1-5-13

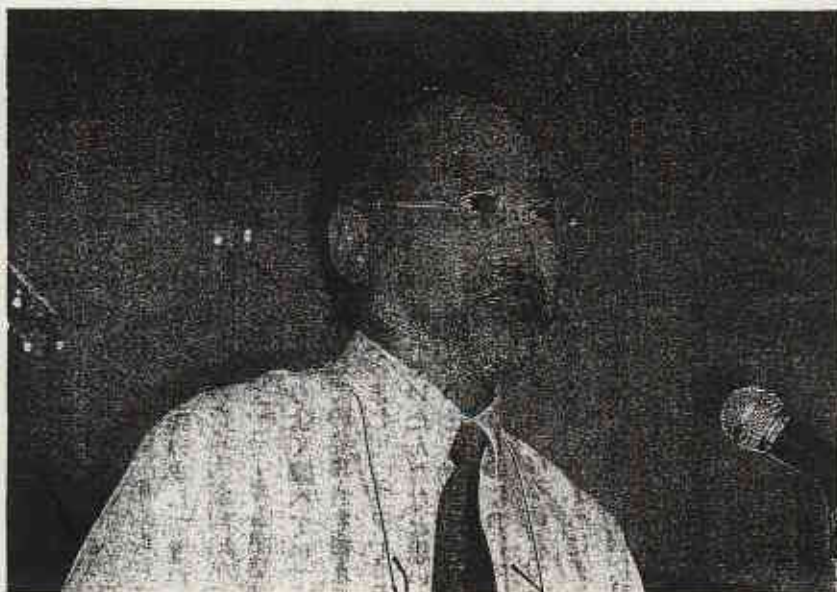
仰秀ビル6F

電話 (03) 5524-3520

FAX (03) 5524-3521

e-mail: jimukyoku@decaa.org

http://www.decaa.org/



日時：平成15年7月1日(火) 午前10時～12時

場所：千代田区 アルカディア市ヶ谷 (私学会館)

(早稲田大学文学部教授 留守 晴夫氏)

留守 晴夫先生の紹介

軍関係以外の方から軍のお話をしていただけで、皆様方から非常に大きな反響があり、朝の研究会としては近來にない大勢の方にお集まりいただきました。留守先生は昭和二十三年仙台市の出身でございます。昭和四十六年に早稲田大学の政経の政治学科を卒業されてからまた文学研究科英文科に入られ、修士博士過程を経られて、六十三年から在外研究員としてマサチューセッツ州に滞在してアメリカ文学の研究に励まれました。帰られましたして助教、そして現在文学部の教授として活躍をしております。

専攻はアメリカ文学でございます。いましてエドワーズ、ホーソン、メルヴィル、ウォーレン、ヘミングウェイと言ふような名だたるアメリカの作家の研究をされておられ、また、特にテーマとして「南北戦争とアメリカの文化」「日本の近代化と日米関係」というテーマに取り組んでおられます。なぜ、留守先生が栗林中将の研究に入られたかということ、今からお話があると思っております。さっそく先生からお話を承りたいと思っております。

(常任幹事より)

なぜ今栗林中将か

第であります。

当初はそんなに長く連載するつもりはなかつたんですが、いろいろ書いていく内にだんだんおもしろい問題が見えてくると言いますか、栗林中将の生涯を考へる事が出来るということになって、その位の分量になつた訳です。

私はアメリカ文学が専門で、特にメルヴィルとかヘミングウェイ、メルヴィルというのは白い巨大なマッコウクジラを捕鯨船の気違い船長が追つ掛けるという『モービー・ディック』という話で有名なアメリカ最大の作家であります。ヘミングウェイというのは、これまた巨大な

勝敗は日米文化の差

アメリカ文学者の衝動的論述

カジキマグロを老いたる漁師が追っ掛けるという『老人と海』という作品で有名な二〇世紀の大作家であります。なぜかどちらも魚を追っ掛ける話に縁があるわけですが、そういうアメリカ文学、アメリカ小説の勉強をしているものですから、軍事問題についても帝国陸軍についてもまったくの素人であります。

そういう素人の私が何故、硫黄島戦或は栗林中将のようなことについて書くのかという質問を連載中からよく受けました。中には軍事評論家になるつもりかというふうなことを言われたこともありました。もちろんそんなつもりも能力もありません。で、何故私が硫黄島戦とか栗林中将のことについて書くことになったか、その理由なんです。これは一口では申し上げ難いようないろいろなことがあるのですが、前もって少しご説明しておいた方がこれからの話がお判りになりやすいだろうと思います。

私が栗林中将に関心を持つようになったきっかけは、今から十五年程前のことです。当時大学の在外研究員として、マサチューセッツ州のボストンから車で二〇〇キロ位西に行ったところにあるアマーストという小さな大学町に滞在しておりました。明治時代のクリスチャンの内村鑑三とか同志社を作った新島謙とかが学んだ有名な大学です。ある時、たまたま、古本屋の店

先のきたない小さな本が山積みになっているところで『硫黄島』という題の古本を見つけました。一九六五年、リチャード・ニューカムというジャーナリストが書いた本です。発売と共にたちまちベストセラーになったと言われています。題名がちよっと気になったものですから、暇な時にでも読んでみようかと思いついて買ってきて、読み出してみたら大変面白かったです。

特に、ニューカムが栗林中将のことをかなりよく調べていて、しかも指揮官としての見事さを讃えているところを読みまして、そういうりっぱな日本軍人もいたんだなと思いました。私は昭和二十三年生まれの戦後生まれで、軍人というものについてはまったく無知ですから、なるほどそういう軍人もいたのだというふうに思ったわけです。アメリカに居たせいもありまして、日本人として何か誇らしい気持ちになったことをおぼえております。

その後、別に栗林中将の本を書くなんて思ったことはなかったんですが、帰国してから専門のアメリカ関係のことについて、特にアメリカのすぐれた文学者とか思想家を通してアメリカ文化論のようなものを『月曜評論』に連載していたのですが、そのうちに何か優れた日本人について書いてみたいなど、これは日本人としての心理的必然なのかもしれないが、そういう気持ちが出てきました。誰がいるかなと思っ

時にふと浮かんできたのが、栗林中将だったわけです。まったくの偶然で始まったということになります。

帝国陸軍きつての知米派で、アメリカ滞在五年間、アメリカの力を大変よく知っていた。ですからアメリカと戦争をするということに対しては極力反対していました。しかし最後には硫黄島でアメリカが舌を巻くような見事な戦いをして戦死しました。硫黄島戦は太平洋の戦場でアメリカ軍の被害が日本軍のそれを上まわる唯一の戦闘でした。アメリカ軍の死傷者が二万七千、日本軍が二万。その唯一の戦闘を指揮して散つていった。

そういう栗林中将という立派な日本人の、アメリカとの戦いぶりについて調べていったら、日本人とアメリカ人という、文化を頗る異にするそれぞれ国民性の本質的問題といえますが、そういうものについていろいろと面白いことが分かってくるのではないかと思いました。といえますのも、戦争というのは文化ですから、文化というのはどこのつまりは民族の固有の生き方ということになるわけですから、日本人はいかにも日本人らしい戦い方をすれば、アメリカ人はいかにもアメリカ人らしい戦い方をします。そういうことになる。ですからその日本人らしさ、或はアメリカ人らしさというものを、硫黄島戦を通して考えて見たいというふうな気を起こしたわけです。

また、近代日本といえますのは、今ペリーがやってきて百五〇年ですね、あれから百五〇年後の今日まで、好むと好まざるとにかかわらずアメリカと宿命的に結び着いているわけで、今後も予見しうる将来は結び着いて行かざるを得ない。そういう日米の宿命的関係というものを通して近代日本のいろいろな問題について合わせて考えることが出来たらいいなと、『盲蛇に怖じず』という感じもあつたのですが、そういうことを考えて栗林中将についての連載を始めたのです。

途中いろいろと中断しまして、なかなか書けなくなってしまうということがあります。資料が本当にたりなくて、戦後の打ち壊しといえますが、軍関係の資料というのは本当に無くなつてしまつていて、随分苦労をしました。そういう意味での困難もあり、随分中断したんですが、中断していると栗林中将が天国で泣いているぞとある読者から言われまして、これは頑張らざるを得ないなという感じで一応なんとか最後まで行つたということでした。

アメリカ人にとっての

硫黄島戦

そうして調べ出しますと驚いたのが、硫黄島戦がアメリカ人にとっていかに大きな意味合いを持っているかということでありました。

ニューカムの本は発売されてすぐベストセラーになりましたけれど、ここに持ってきたこの本は今から三年前に出た本です。Flags of Our Fathers、「父達の旗」という本ですが、これも発売されてすぐベストセラーになりました。丁度この本が発売された頃に私はアメリカを旅行しておりました、ワシントン近辺を彷徨っていたのですが、

間アメリカでは硫黄島戦について沢山の本が出ています。いろいろな専門家の研究書も書かれています。要するに硫黄島戦に対するアメリカ人の関心は今なお強く持続しているということがあります。

そういう書き方というのは読者をミスリードするものであって、スターリンググランドとか硫黄島とかの本当の激戦とは違うんだと言っていました。つまりスターリンググランドの攻防戦と硫黄島戦というのは彼らにとつて見ると同じレベルで語られるということになるわけです。これが二度目です。

どこの本屋に行っても目立つところにこれが置いてありました。相当売れているんだなという感じがしました。「父達の旗」という題からもお判りのように、硫黄島の摺鉢山のとつべんに星条旗を立てた五人の海兵隊員と一名の海軍兵の、その海軍兵の息子ジェイムズ・ブラッドリーが書いた本です。摺鉢山に星条旗を立てるまでの六人の若者の人生の軌跡と、その後どうなったのかということをかかなり克明に調べた本です。

本だけではなくて、今回のイラク戦争の時にたまたま硫黄島戦にアメリカ人が言及するのに三度接する事になりました。一度目は、CNNのニュースを見ていた時です。アメリカ軍がイラク領内に攻め込む直前の時期ですが、クウェート領内のイラクとの国境に近い米軍のキャンプにイラクからミサイルが飛んで来て、頭上を越えていった時の模様をCNNの従軍記者がテレビで報道しておりまして、最後に「キャンプ硫黄島からのレポートでした」と言ったのです。要するにアメリカ海兵隊は今回のイラク戦争において、最前線のキャンプに硫黄島の名前を付けていたということになります。これが一度目です。

三度目は、これは五月一日、ブッシュ大統領が空母に戦闘機で乗り付けているいと騒ぎになった時の、例のイラクにおける事実上の戦闘終了宣言のスピーチの中で、ブッシュ大統領がアメリカの兵士の勇気を讃えて「ノルマンディーや硫黄島の時と同じ勇気を今回もアメリカ兵は示してくれた、誇りに思う」と言ったのです。

#

ただ私はこの本はあまりお勧めしません。些か不愉快な本です。というのは日本陸軍に対する考え方にある種のバイアスが掛かっています。読んでいてそんなにおもしろい本じゃないからです。ただ、当時の海兵隊がどういう考え方を持っていて、どういう訓練をして、そしてあの硫黄島まで行って戦ったかということについてはいろいろと参考になる本です。

二度目は、ケーブルテレビでCNNと競っているフォックステレビというのがありますが、その有名なニュースキヤスターがインターネット上に発表した文章をたまたま読んだことがありますが、彼はアメリカのメディアの報道の仕方を批判しています。例のバクダッド攻防戦、あれをアメリカのメディアはとんでもない激戦のように報道しているけれども違うんだと、

硫黄島戦の時のアメリカ側の指揮官はポーランド・スミスという大変おもしろい軍人ですが、彼は有名な回想録を書いて、その中で硫黄島戦とゲティスバーク戦を結び付けています。つまり、アメリカ人にとつては、昔も今も、大きな危機に直面した時、硫黄島戦はノルマンディー、スターリンググランドそしてゲティスバークと同じレベルで語られる、そういう非常に特別な戦闘であるということが、今回たまたまテレビを見ていたりインターネットを見たりして感じてきました。

このブラッドリーの本と先に紹介したニューカムの本との間には三十五年の歳月が流れているわけですが、その

名前が出てくると、なるほどこれは大変なものだなどつくづく感じます。もちろんインターネットには硫黄島戦に関するホームページも出ています。今回のイラク戦争の過程でたまたま私

硫黄島戦というのが非常に大きい戦闘なんだということは知っていましたけれども、こういう形で硫黄島という

名前が出てくると、なるほどこれは大変なものだなどつくづく感じます。もちろんインターネットには硫黄島戦に関するホームページも出ています。今回のイラク戦争の過程でたまたま私

今の日本人は殆ど硫黄島戦を知らない

ところが私は今年学生に硫黄島戦の話をしておりまして、日米比較文化という授業なんです。ビデオを見せたり何かしていますと、学生も本当にびっくりしたような顔をしています。

最初の授業の時に「硫黄島戦を知っている者手を挙げる」というふうに言いましたら、学生はだいたい百五〇名位のクラスですが、手を挙げた者はゼ